



# NEWS LETTER

発行:水資源・環境学会

NEWS LETTER No.88

2023年1月15日

## 水資源・環境学会 40周年にあたって

水資源・環境学会 会長

仲上 健一

### 目次

水資源・環境学会40周年にあたって	1
2022年度冬季研究会について	2
2023年度研究大会のご案内(第1報)	7
学会創立40周年記念事業 水資源・環境学会ブックレット 『環境問題の現場を歩く』シリーズの開始について	8
事務局からのお知らせ	10

新年あけましておめでとうございます。

本年は、水資源・環境学会の前身である水資源・環境研究会の研究会が1983（昭和58）年6月20日に行われてから40年の節目の年にあたります。研究会創設の詳細は、『水資源・環境研究』26巻2号（2014年2月9日発行）に「学会の成立経緯から展望する水資源・環境研究の課題と将来」として記載されていますのでご覧ください。その研究会は、1984年に水資源・環境学会として発足し、今日に至るまで、学会誌「水資源・環境研究」は35巻1号（2022年6月28日発行）、ニュースレターは、本号で88号となりました。また、評判の良い2017年2月14日に始まった水資源・環境学会ブログは40号近くになってます。初代会長である板橋郁夫先生は、今年100歳になられるということです。

2020年1月20日のブログに掲載されています地域社会研究所大橋浩会員の京都・藤森神社「不二の水」は「武運長久、学問向上そして勝運を授けてくれる水として信仰されています。」ということで、ここまで水資源・環境学会は成長してきました。水六訓（下図）は、水資源・環境研究を志す者にとって、意義深いものです。



水六訓の立て札（撮影：大橋 浩会員）

水資源・環境学会40周年にあたって、色々なプログラムが展開されます。

2023年3月4日（土）に行われる冬季研究会は、テーマを「琵琶湖・淀川・大阪湾の水資源・環境問題の諸相と政策的課題」とし、水資源・環境学会の地域研究の原点である近畿地方の重要な淀川流域に焦点を当て、その現代的課題を歴史的・政策的に大胆に総括しようという意欲的な試みです。

また、2023年6月3日（土）に拓殖大学での開催を予定している研究大会は、「水の安全保障と水利用」というテーマに基づき、現下の関心事である「水の安全保障」に水資源・環境学会として本格的に取り組むことが企画されています。

さらには、伊藤達也編集委員長を中心として、学会としての新企画であるブックレットの刊行計画が進行しております。

会員諸氏の水資源・環境学会への参加と積極的な問題提起を期待し、新年のご挨拶とします。

## ☆☆ 2022年度 冬季研究会について ☆☆

### 【テーマ】

「琵琶湖・淀川・大阪湾の水資源・環境問題の諸相と政策的課題」

### 【開催日時】

2023年3月4日（土） 14時00分～16時30分

### 【開催方法】

Zoomにて開催

※対面形式の会場はありません。ご了承ください。

### 【参加登録】

以下のサイトから2023年3月2日（木）までに登録をお願いします。

<https://us06web.zoom.us/meeting/register/tZwrcu2grDMrG9LI9zd-5Brd2BwebNZZR7h6>

### 【参加費】

会員・非会員とも無料です。

### 【冬季研究会に関するお問合せ先】

学会事務局 info@jawre.org へお願いします。



## 開催の趣旨

2022(令和4)年5月27日、「淀川水系における水資源開発基本計画」の全部変更について、閣議決定を経て国土交通大臣により決定されました。本計画の特徴は、①最新の政策動向等の反映「新たな気候変動適応計画、流域治水関連法の施行など最新の政策との連携を明確化」、②淀川水系の特徴の反映「琵琶湖の恵みの継承をその他重要項目として位置づけ、健全な水循環の維持・回復に努めるとともに、生物多様性の保全及び再生を図り、湖沼環境の保全に努めること」等、これまでの、渇水時を基準に水の安定供給を目指してきた需要主導型の前計画及び当初計画(1962(昭和37)年8月17日)とは大きく異なります。まさに、気候変動、生物多様性、市民参加等々の時代背景を反映した計画といえるでしょう。

今回の冬季研究会では、水資源開発基本計画の変更の背景である琵琶湖・淀川・大阪湾の水資源・環境問題の諸相をレビューし、政策的課題を抽出することを狙いとししました。建設省近畿地方建設局による『淀川百年史』(建設省近畿地方建設局、1974年)が発刊されて50年が経とうとしており、併せて2023年は、琵琶湖総合開発特別措置法が成立して50年目に当たります。

水資源・環境学会設立40周年にあたる2023年において、水資源・環境学会の設立趣旨である「これまで発展してきた個々の科学研究の成果を、総合科学として創造的に再構成する必要が求められている。我々は、この要請に応えるため、学際的な研究交流の場を設け、水資源・水環境に関する研究の健全な発展を期するものである。」という精神を受けて、琵琶湖・淀川・大阪湾の水資源・環境問題を改めて大胆に総括することをめざします。

今回の研究会をその出発点として位置づけるとともに、水資源・環境学会に、有志による「琵琶湖・淀川・大阪湾研究部会」を設定し継続的な研究を試みようと考えています。

## 2022年度 冬季研究会 プログラム

総合司会：仁連 孝昭(成安造形大学・客員教授)

### 開会挨拶

14:00-14:10

仁連 孝昭

### 報告

14:10-14:50 「琵琶湖・淀川・大阪湾の水資源・環境問題の諸相

—「水資源開発」から「水環境保全」へ—

秋山 道雄(滋賀県立大学・名誉教授)

14:50-15:05 コメント報告① 「水資源開発計画の視点から」

仲上 健一

(立命館大学OIC総合研究機構サステナビリティ学研究センター上席研究員)

15:05-15:20 コメント報告② 「淀川の歴史的・文化的視点から」

三輪 信哉(大阪学院大学国際学部・教授)

### 総合討論

15:20-16:30 司会：仁連 孝昭

## 2022年度 冬季研究会 要旨

### 報告

#### 「琵琶湖・淀川・大阪湾における水資源・環境問題の諸相—「水資源開発」から「水環境保全」へ—」

秋山 道雄

2022年は、琵琶湖総合開発特別措置法が成立して50年目に当たる。以後、25年間にわたって実施された琵琶湖総合開発事業が終了して25年目になるという節目の年でもある。また、2022年5月には、淀川水系における水資源開発基本計画（淀川水系水資源マスタープラン）が変更された。ここでは、従来のような需要主導型の「水資源開発の促進」からリスク管理型の「水の安定供給」へ計画を転換すると謳っている。戦後、日本の水資源開発を主導する柱となった水資源開発促進法が1961年に制定され、淀川水系がその指定水系となったのが1962年であった。それから60年を経て、淀川水系における水資源開発の時代は名実ともに終了しようとしている。

琵琶湖総合開発が取りざたされていた1960年代から1970年前後にかけては、琵琶湖・淀川水系の汚濁が進み、水域の環境問題に対する社会的関心が高まってきた時期であった。それゆえ、琵琶湖総合開発は発足の当初から水資源開発への対応と水質汚濁対策とを併行して進めていくという課題を担っていた。琵琶湖総合開発50年という節目の年は、琵琶湖総合開発が抱えてきたこの課題がどのように克服されたのか、またその後新たに登場した課題にどう取り組んできたのかを検証していく時期でもある。

琵琶湖総合開発終了以後四半世紀の間に、琵琶湖・淀川水系における水環境問題の中心は水質汚濁問題から生物多様性保全問題へと移行した。こうした変遷につれて、「水資源開発」から「水環境保全」へという水問題のレジームシフトは、水に関わる研究や政策において対象を把握する枠組みの転回を要請するという状況をもたらしている。水資源開発を対象とする場合には、水循環が認識の枠組みを形成していたが、水環境保全が対象になると水循環に加えて生態系を構成する要素が生起させる生産・消費・分解という

循環を認識枠組みに加える必要が登場した。こうした生物の生命活動が展開する場を総体的に把握することによって初めて生態系循環を捉えることができるから、対象となる空間スケールは琵琶湖・淀川・大阪湾という流域圏（流域圏＝流域＋用水域＋沿岸域）となる。本報告では、こうした場の特性とそこにおける課題を整理して、琵琶湖・淀川・大阪湾を一体として捉える視座の重要性を示していく。

### 琵琶湖

1997年3月に琵琶湖総合事業が終結する際に、滋賀県は国が関与する琵琶湖総合保全の枠組みを設定して保全事業を進めようと企図していたが、当時はそれが実現しなかった。その後、2015年秋に至って「琵琶湖の保全及び再生に関する法律」が制定された。琵琶湖保全再生法では、国が「琵琶湖の保全及び再生に関する基本方針」を定め、これにもとづいて滋賀県が「琵琶湖保全再生施策に関する計画」を策定することになっており、2017年3月に琵琶湖保全再生計画が策定された。報告者は、2018年度の本会研究大会において「琵琶湖保全再生計画の試金石—クリティカルポイント・赤野井湾の事例から—」というタイトルで、琵琶湖保全再生計画の内容とそれが抱える課題ならびに琵琶湖の実態との関連について報告した。今日では、琵琶湖の研究や政策形成においては生物多様性保全が主要なテーマとなっているが、本報告ではそれをめぐる課題を整理していく。

### 淀川

淀川水系において水資源開発を促す契機となった工業用水、都市活動用水、家庭用水の需要は琵琶湖総合事業の前後から鈍化ないし低下しており、21世紀に入ってから水資源開発は実質上主要なテーマとはならなかった。今日では、2018年度の本会冬季研究会において「新たな水道広域化・民営化の動向と課題—水道法改正（案）をめぐって—」というテーマが取り上げられたように、水道事業の持続可能性をめぐって広域化や民営化が議論されているという状況



## 2022年度 冬季研究会 要旨

にある。水道の事業経営に焦点のあたる昨今であるが、淀川水系における都市用水の動向とその在り方を考察する際には、都市における水道の意味を再考することが重要であろう。上水道や下水道が都市の装置として普及し、一般の市民が蛇口や排水口を介してしかこの装置に接することがない状況の中で、「都市における水道（ここで水道という言葉は上水道と下水道を統合した都市的水利用システムの意味で用いる）の意義は何か」という問いは、「都市における人間環境とは何か」という問いによって逆照射される必要がある。これに応える過程で、水道誌研究への扉を開く契機が浮かび上がってこよう。

### 大阪湾

沿岸域は、2種類の生態系の境界領域（エコトーン）としてたえず水位の変化や侵食、堆積などが起こり、環境は著しく不安定である。しかし一方で、生物の分布が集中し、その生産力や生物活性がきわめて高いところとしても知られている。そのため、沿岸域は生物多様性の面からみて重要な位置を占めている。沿岸域に関する制度としては、2007年に施行された海洋基本法にもとづき、2008年に海洋基本計画が策定された（2018年改正）。この中では、自然的社会的条件から見て海域と陸域は一体的に管理すべきと規定されている。海の側からは、海域と陸域を統合した沿岸域管理の重要性が認識されているが、陸の側ではたとえば淀川水系における水資源開発基本計画に「水資源の開発及び利用に当たっては、河川の源流から河口域に至る水系及び治水・利水・環境にわたる健全な水循環・物質循環系の一貫性を認識する」と記されているように、認識や施策の対象は河口域にとどまっている。「水資源開発」から「水環境保全」へという水問題のレジームシフトが、水循環に加えて生態系循環をその認識枠組みに加えることを要請している今日、流域・用水域・沿岸域を統合した流域圏の中で水政策が展開していく経路を探索していくという課題が登場してきた。

### コメント報告①「水資源開発計画の視点から」 仲上 健一

1972年に始まった琵琶湖総合開発事業から50年が経過した。本事業は近年の琵琶湖淀川水系の最大の事業であるだけでなく、戦後日本の最大の総合河川開発事業でもある。

琵琶湖淀川水系では、これまで数多くの水害や渇水を経験してきた。1917(大正6)年10月1日には、淀川右岸の大塚堤防（現在の高槻市大塚町）が約200メートルに渡って決壊した。付近はたちまち泥海となり、淀川右岸の最下流部である西成郡（現在の大阪市西淀川区）まで到達した<sup>1)</sup>。1910(明治43)年に完成した日本で最初の近代治水工事「淀川改良工事」によって完成したばかりの堤防を切断し放流した。

2022年9月30日には、水害から市民を守ることを誓う「淀川大塚切れ発生の伝承式」が淀川堤防にある洪水記念碑前で行われ、その教訓が地元で伝承された。

近年の極端気象の影響で、再び淀川の洪水氾濫の可能性も現実味を帯びてきた。これに呼応したように、国土交通省淀川河川事務所では、「想定し得る最大規模」の降雨に対応した新しい「洪水浸水想定区域図」を2017年6月14日に公表した。計算条件として現実に想定しうる最大規模の降雨を360mm/24時間（年超過確率1/1,000）とし、さらに精度を上げるために氾濫シミュレーションメッシュサイズを25m×25m、地盤高を航空レーザ測量データから設定したのが特徴である<sup>2)</sup>。その想定結果は、驚くべきものであり、改めて淀川流域における洪水の脅威を身近に感じることができる。

一方では、水需要追従型と言われてきた、淀川水系の水資源開発計画も、社会経済変化を背景に、2022(令和4)年5月27日、「淀川水系における水資源開発基本計画」の変更が、閣議決定を経て、国土交通大臣により決定された<sup>3)</sup>。水資源開発計画に関して、淀川水系の水資源計画は、1962年（昭和37年）4月に水系指定されて以来、これまで5回にわたって計画決定されてきた。本計画では、「水資源を巡るリスクへ



の対応を新たに目標に加え、既存施設の徹底活用を基本戦略としたハード対策とソフト対策を一体的に推進することで、安全で安心できる水を安定して利用できる仕組みをつくり、水の恵みを将来にわたって享受できる社会を目指します。」とする内容であり、60年ぶりの大幅な変更である。

本計画の特徴は、以下の2点である<sup>3)</sup>。

- ① 最新の政策動向等の反映：新たな気候変動適応計画、流域治水関連法の施行など最新の政策との連携を明確化 等
- ② 淀川水系の特徴の反映：琵琶湖の恵みの継承をその他重要項目として位置づけ、健全な水循環の維持・回復に努めるとともに、生物多様性の保全及び再生を図り、湖沼環境の保全に努めること等を記載、特に、新たな視点として、次の4点である<sup>4)</sup>。

1. 供給の目標に、発生頻度は低いものの水供給に影響が大きいリスクを追加
2. 需要と供給の両面に存在する不確定要素を踏まえて、水需給バランスの点検を行い計画を策定
3. 供給の目標を達成するための必要な対策としてソフト対策を計画に掲げ
4. PDCAサイクルの導入

以上のような、計画変更は、この60年間の淀川水系の自然的・社会的環境を反映したものであるが、その意義について水資源・環境学会としても、大いに議論をすべき内容であろう。

さらには、淀川水系の特徴の反映を反映して、「琵琶湖の恵みの継承をその他重要項目として、健全な水循環の維持・回復に努めるとともに、生物多様性の保全及び再生を図り、湖沼環境の保全に努めること等」が記されている<sup>5)</sup>。

これらの水資源開発計画の変更の背景としては、1997年河川法改正があろう。改正法では、河川整備の基本となるべき方針を決めた河川整備基本方針と、具体的な河川整備内容を決めた河川整備計画を設定することとなった。このうち河川整備計画は、地方自治体首長や地域住民等の意見を反映する「流域委員会」などの諮問機関が設置され、議論が行われることとなった。淀川水系においても、「淀川水系流域委員会」が、淀川水系において「河川整備計画」に

ついて学識経験を有する者の意見を聴く場として、2001(平成13)年2月1日に近畿地方整備局によって設置された。本委員会は淀川モデルとして、全国的に注目された。その活動の総括は、「淀川水系流域委員会レビュー委員会まとめ」(2007(平成19)年4月6日)にも記されているところであるが、これから100年後の淀川水系の河川整備にとって重要な意味を持つであろう<sup>6)</sup>。

琵琶湖・淀川・大阪湾も「水資源開発」から「水環境保全」へと大きく舵を切ろうとしている。計画決定プロセスに、市民参加の視点とともに100年後を見据えた水資源・環境学会としての専門知の結集も必要であろう。

- 1) 国土交通省淀川工事事務所、淀川大塚切れ  
<https://www.kkr.mlit.go.jp/yodogawa/know/history/ootsuka/index.html>
- 2) 国土交通省淀川工事事務所、淀川浸水想定区域図  
<https://www.kkr.mlit.go.jp/yodogawa/activity/maintenance/possess/sotei/index.html>
- 3) 国土交通省水管理・国土保全局水資源部 水資源計画課、Press Release, 令和4年5月27日
- 4) 第23回国土審議会水資源開発分科会配布資料 資料5-4、令和4年1月28日
- 5) 第23回国土審議会水資源開発分科会配布資料 資料2-2、令和4年1月28日
- 6) 仲上健一、「淀川水系整備計画をめぐる対立と合意形成」、計画行政、第31巻第2号、2008年6月



## コメント報告②「淀川の歴史的・文化的視点から」

三輪 信哉

18世紀以前、滋賀、京都、奈良、大阪の水は全てが現大阪市内に集中していた。大きくは、大阪の中心部に流れ込む大和川水系を切り離し、次いでは新淀川を開削し、淀川水系、寝屋川水系、大和川水系と水系を三分割し、琵琶湖をダム化することで、市内の繁栄を築き上げた。数百年規模の大改造である。

かつて末石は、確率年の上に立つ利水、洪水制御のあり方を厳しく批判したり<sup>1)</sup>。渇水や洪水を、人が人生の間に10年に一度体験するような強度を、人生に一回程度、あるいは都市の年齢を基準にした100年に一度、といった災害を前提にして、対すべき技術を高度化することが、かえって被害の規模を引き上げる。ならば人が人生の間に体験する災害を許容しつつ、ダムや堤防嵩上げだけで対処するのではなく、水循環や人々の生活のあり方までも含んだ多様な水との関わりを、人々が我が事として受け止めて合意形成をはかる水民主主義を構想し、水との付き合いを人々が我が事として考え行動するあり方を提示した。

末石が構想してから既に半世紀近くが過ぎようとしている。土木技術はさらに高度化し、人生をはるかに超える確率年に対処する技術を磨いてきた。度重なる震災の体験から、ハザードマップ化により被災そのものが自己責任に転嫁されると同時に、レジリエンスが技術の高度化のみに置き換えられる、という相変わらずの二極の攻めで越えようとしている。

人は人生で一度、被災し悲惨な目にあつたとしても、同じ被災地に再度経済を集中させ、再び同じ轍を踏むものであるということも明らかになった。100年に一度、1000年に一度とするのは、遠大な長期計画の視点をもつかに見えるが、そうではない。実に目の前の、今日、明日の経済の繁栄を死守するためである。

温暖化を通じてバックキャストの見方がようやく受け入れる時代がきた。ならば100年先、数百年先の都市のあり方をえがいて、そこから今何を積み上げていくべきか、遠大かもしれないが、1%の投入を100回重ねて100年後に至るようなあり方を検討できないか。

全ての川の流れを受け止める大阪湾は、廃棄物処分場と同じく、人々には目に見えない別空間として人々の視野から失われている。豊穡の海に復元し、海の恵み、川の恵みから陸の恵みを体験を通じて知ることができる、夢ともいふべき絵をどう描くのか。100年後の森の姿を描いて、全国の木々を集めて植樹を重ね、都市内に広大な森を作り上げた例もある。

- 1) 末石富太郎、「水資源危機—渇く都市をどう救う」日経BPM、1978年4月

### 2023年度研究大会のご案内(第1報)

【テーマ】「水の安全保障と水利用」

【開催日時】2023年6月3日(土) 10時00分～17時00分

【会場】拓殖大学 文京キャンパス(東京都文京区小日向3-4-14)

※詳細はニューズレター89号(2023年4月下旬発行予定)でお知らせします。

**学会創立40周年記念事業**  
**水資源・環境学会ブックレット**  
**『環境問題の現場を歩く』シリーズの開始について**

**担当:伊藤 達也**

水資源・環境学会は学会創立40周年を記念して、ブックレット『環境問題の現場を歩く』シリーズの発行を開始することにしました。概要は以下のとおりです。執筆者は学会員に限定しています。会員の方で執筆希望の方は担当の伊藤 (tito@hosei.ac.jp) までご連絡ください。

知り合いで「書かせたいな」「書いてもらいたいな」と思う人がいましたら、ぜひ学会にお誘いください。大勢の学会員の執筆を期待しています。これから数年は執筆希望者がたくさんおられると思いますので、早めに書きたい人はまずはエントリーをお願いします。エントリーの早い人から対応します。

少し先になりますが、2回目、3回目の執筆を希望される方もいるかと思えます。そちらについては、発行が順調になってきた頃に考える予定です。

企画の題名：ブックレットシリーズ『環境問題の現場を歩く』

発行ペース：執筆希望者の数にもよりますが、当面の間、年間6冊（半期3冊ずつ）くらいのペースでの発行を予定しています。

	第2回（2023年11月）	第3回（2024年5月）	第4回（2024年11月）
①執筆希望の意思表示	2023年5月末日まで	2023年11月末日まで	2024年5月末日まで
②担当（伊藤）から 理事会に提案、 発行決定の伝達	2023年6月中	2023年12月中	2024年6月中
③発行決定時の 原稿締切	2023年8月末日	2024年2月末日	2024年8月末日
④発行	2023年11月末頃	2024年5月末頃	2024年11月末頃

**これから執筆を希望頂いた場合、発行までのスケジュール（第4回までを掲載）**

※要は、「発行（11月or5月）の半年前までに意思表示→3か月前までに原稿を提出」という流れです。

体裁：A5判 ページ数：60～80ページ 価格：1,000円

形式：2人著者体制。1人30～40ページ

（字数は3万字程度でしょうか。図表写真込みです。図表、特に写真多めをお願いします）  
 なお、執筆者の組合せは学会にお任せいただきます。



内容：図表、写真の類はこれでもかというくらい入れていただいて結構かと思えます。研究論文ではなく、内容はそれなりの水準を保ちつつ、「この本をもって現地に見学に行く」を目指しています。ですので、注はできるだけつくらない、つくるときはページ下に2~3行で収まるくらい、できれば本文中で( )を使って説明してしまう。できるだけ読み物にしたいので、堅苦しくないものを目指しています。

出版社：成文堂 ※成文堂から1冊発行にあたり、一定の買い上げを要請されています。

第1回出版：2023年5月末発行予定（まずは理事会メンバーを中心に執筆者を募りました）

- ブックレットNO. 1 仁連孝昭「琵琶湖を歩く」  
 仲上健一「志津川湾を歩くー里海の価値を測るー」
- ブックレットNO. 2 伊藤達也「長良川河口堰を歩く」  
 山本佳世子「野川を歩く」
- ブックレットNO. 3 梶原健嗣「八ッ場ダムを歩く」  
 奥田進一「二風谷ダムを歩く」

執筆テーマ：理事会で以下のリストを出させていただきました。

ただ、この表にないテーマでも全く構いません。

赤枠で囲んだテーマは第1回出版（2023年5月末発行予定）のテーマです。

※本表にないテーマもあります。

	テーマ	執筆者		テーマ	執筆者
1	知 床		21	長良川河口堰	
2	二風谷ダム・苫小牧東		22	徳山ダム	
3	鮭(豊平川)(三面川)		23	新幹線騒音(埼玉、名古屋)	
4	白 神		24	空港騒音(大阪空港、名古屋空港)	
5	八郎潟(干拓、河北潟なども)		25	琵琶湖	
6	福島原発事故		26	八幡堀(内湖干拓)	
7	尾瀬沼		27	瀬戸内海(鞆の浦)	
8	八ッ場ダム		28	別子	
9	足尾鉍毒事件		29	中海・央道湖	
10	安中公害		30	苫田ダム	
11	霞ヶ浦		31	カブトガニ(笠岡、伊万里、北九州)	
12	東京湾の埋め立て、水質汚染		32	北九州公害(洞海湾)	
13	光化学スモッグ		33	蜂の巣城事件(松原・下笠ダム)	
14	江戸川漁業被害		34	水 俣	
15	第二水俣病(新潟水俣病)		35	諫早干拓・有明海	
16	神岡(イタイイタイ病)		36	柳川の掘割	
17	田子の浦のヘドロ公害		37	土呂久ヒ素	
18	三島のグランドワーク		38	川辺川ダム	
19	伊勢湾・三河湾の汚染		39	志布志	
20	四日市ぜんそく		40	沖縄(リゾート開発)	
その他の候補)石木ダム 三陸海岸の津波被害 豊島(廃棄物不法投棄) オオサンショウウオ ホテル					
カモシカ・鹿・イノシシ・サル、海洋プラスチック(亀岡)、釧路湿原 藤前干潟					
野生動物の保護(コウノトリ、トキ) 河童					
海外編もできるといいなあ					

## 事務局からのお知らせ

水資源・環境学会公式ブログの最新情報  
(<http://jawre.seesaa.net/>)

適時、水資源・環境に関する「なにか」をお伝えします。  
直近の記事は下記の通りです。ぜひアクセスください。

- ・ 伊川谷の掘割のこと 矢嶋巖（神戸学院大学）
- ・ おすすめexcursion：水をめぐる伏見ぶらり散策 花田真理子（大阪産業大学）
- ・ 「親水」概念の源流をたどる 大野智彦（金沢大学）

## 学会誌原稿募集

水資源・環境学会では学会誌「水資源・環境研究」への投稿を募集しております。「水資源・環境研究」は、年2回、電子ジャーナルとしてJ-STAGE上で発行しており、会員の皆様に原稿を迅速に公開し、原稿の投稿機会を増やすことを目指しております。また、「論文（論説）」や「研究ノート」の他に、国内外における地域の話題や時事問題等をテーマにした「水環境フォーラム」、書評も受け付けております。

次号（第36巻1号、2023年6月発行予定）の締め切りは、「論文（論説）」「研究ノート」は2023年1月31日、それ以外は2023年4月30日です。また、次々号（第36巻2号、2023年12月発行予定）の締め切りは、「論文（論説）」「研究ノート」は2023年7月31日、それ以外は2023年10月31日です。

投稿規程や執筆要領は学会ホームページ（下記URL）にあります。投稿希望の方は原稿送付状をダウンロード・ご記入の上、投稿原稿に添えて下記学会事務局まで電子メールにてご送付下さい。学会誌の内容をさらに充実させるべく、皆様の積極的な投稿をお待ちしております。

水資源・環境学会 事務局長 仁連 孝昭

（学会事務局メールアドレス） [info@jawre.org](mailto:info@jawre.org)

（投稿規定） <http://jawre.org/publication/index.html#issues>

（執筆要領） <http://jawre.org/publication/index.html#guidelines>

（バックナンバー目次と内容） <http://jawre.org/publication/index.html#mokuji>

### ■ 連絡先に変更はございませんか？

所属先の変更・転居等により学会からの郵便物が返送されて来る場合や、登録頂いているE-mailアドレスがエラーで届かない場合が多数あります。

所属先、連絡先等に変更がありましたら、すみやかに下記学会事務局までメールでご連絡下さい。

〒604-0022 京都市中京区室町通御池上る御池之町309番地 京都通信社内

発行：水資源・環境学会

<http://www.jawre.org/>

E-Mail: [info@jawre.org](mailto:info@jawre.org)